

今年も早いもので、三分の一が過ぎようとしています。今朝は教会総会礼拝です。76年目の教会の歩みに、共に祝福を祈り、信仰を持って歩み出しましょう。

アシュラムの充満のとき

2020年に、清水先生が関西支部長となられ、翌年から「教会形成5ヵ年計画」として、アシュラムの柱に着想を得た、毎年の主題を掲げています。今年の「充満」は、アシュラムの集会の中では最高潮の時です。

「日本アシュラムの歌」には3番に「主は聖霊の油を注ぎ、愛の炎は燃え上がりたり いざハレルヤの歌を捧げん ああアシュラムの充満のとき」とあります。自らの求めているものを祈り、待ち望み、ついに得られた平安と喜びが充満のときです。

この年が、待ち望んだ祈りの答えを受け取る年となることを期待しましょう。

共にある感謝

「クリスチャン・アシュラム」は、スタンレー・ジョーンズ博士が戦後の日本に紹介しました。北インドのヒマラヤ山脈の麓にある「サッタール湖」で、博士自身が体験した、瞑想がもたらす変化を、日本のクリスチャンたちにも広めたのです。ヨガに代表される、インドはマインドフルネス発祥の地、そこで「イエスは主なり」というクリスチャンの信仰に立った、黙想と祈りのシーケンスを確立しました。

ヨガの世界では、「人の目を気にしないで」「呼吸に集中しましょう」と勧められます。信仰の世界でもそれは同じです。教会に来るのは、人に会うためではありません。祈りという霊の呼吸に集中することが、最も大切なことです。時々、人の目が気になって、祈りに集中できなくなる時がありますが、それは本来の目的の妨げになっているのです。

しかしながら、それとは全く別の意味で、「共に歩む兄弟姉妹がいる」という連帯感は、信仰生活に、欠かせない大きな励ましです。気持ちが沈んで、神様から遠く離れていると感じるとき、賛美が心に響いてこないとき、そんな時は、信仰の友の存在がなければ、教会から離れてしまうことだってあるでしょう。深い信頼関係のできた人に、本心を打ち明けて、共に祈ってもらうことで、求めていた答えを得られます。

「恵みの充満」は、個人的な恵みでありながら、同時に交わりの中で得る恵みでもあります。教会にも、礼拝の他に、祈祷会、家庭集会、祈祷組会、早天祈祷会、各部の集会があります。夏期聖会やアシュラム、ホ群のセミナーやケズィック、地区や教区の集会があります。愛餐会やハートフルコンサートも今年は開催できるでしょう。

導かれるままに、ぜひ様々な集いに参加して、「恵みの充満」を体験してください。